

「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」

酒井 智海

私は、月参り（月忌参り）に伺った際に、いろんな相談を受けることがあります。例えば親類などとの付き合い方です。近頃は、本当に近い身内だけで、葬儀・法事などが行われることが多いようです。

私たちは、両親や家族、そして親しい友人など、多くの人と関わり合いながら生きています。それらの関わりは、自分にとってかけがえのない人の存在を実感させてくれるものです。私が今ここに生きているということは、他との関わりを抜きにしてはないのです。

昔どこかで聞いたことで、思い出される言葉があります。「一人の赤ちゃんが産まれてくるとき、何十人、何百人の人たちが関わっているんだ」と。今だと、産婦人科の先生をはじめ、産院のベッドや保育器、そしてオムツを作った人等々、挙げ出したらキリがないくらいの人たちの手がそこには見えます。勿論、それ以前に両親や周りの人が、元気な赤ちゃんが産まれてくるようにと願ってくれているんです。

誰ひとりとして、一人で産まれてこられる人はいません。誰かに迷惑をかけながら、また、大人になっても、誰かと支えあいながら生きていくのでしょうか。

私たちは日頃、親しい人とそうでない人、自分の味方や敵など、様々な関わりを区別しようとしています。しかしそれによって、逆に自分を孤立させ孤独感や絶望感を持つことも少なくありません。「いのち」とは、私の身勝手な思いを超えて、他の「いのち」と深く関わり合い支え合っています。

「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」（『歎異抄』）という親鸞聖人の「いのち」に対する思いを、自分自身に確かめ直すことが、今私たちに必要とされているのではないのでしょうか。